

スペイン語圏を知る本（その61）

アナ・アロンソ／ハビエル・ペレグリン 作 ばんどう としえ 訳

『イフ if ー王国の秘密』（未知谷、2011年）

評者 坂東 省次



摩訶不思議な物語である。

登場するのは、伝説の剣・騎士・魔法・ドラゴンという、ファンタジーの常とう手段。おまけに、冒頭には、中世スペインの有名な劇作家カルデロン・デ・ラ・バルカの『人の世は夢』の一節が引用されている。本書を手にした当初は、所詮、古くからあるこれらの物語の焼き直し程度だろうと思っていた。ところが、1章を読み終えたころには、この物語はけっして『人の世は夢』の焼き直しでもなければ、古めかしい典型的なファンタジーでもないことに気づく。もちろん、カルデロン・デ・ラ・バルカの『人の世は夢』に、その趣向を借りていることは否めない。実際、本書と『人の世は夢』の登場人物や場面設定は、さまざまに重なりあっているからである。

アナ・アロンソとハビエル・ペレグリンという二人のスペイン人作家が共作したこの物語は、冒頭から読者をひきつけて離さない魅力的な展開を見せる。グラン山脈、ラグの森、目に見えない塔、魔術に満ちあふれたイフ王宮、マボロシ海など、展開する場面にも想像をかきたてられる。しかし、それ以上に読者を魅了するのが、ダウ王女、ケール、アルランド王子という3人の若い主人公と、彼らを取りまく従者シリオ、大魔王アスティルなど、個性的でミステリアスな登場人物だ。

さらに、物語全体をおおっている不思議さは、登場人物の二面性にあるようだ。男装の主人公ダンカン、実はキルダー王国女王ダウであり、物語の鍵を握る魔法の塔の囚人ケールは、魔法の犠牲となっていた少年であった。グラン山脈でダンカン一行が助けた老婆は、実はマボロシ海を守る妖精の女王フアナであった。おもしろいことに、主人公は、助けたと思っていた老婆

に、結果的に助けられていたことも判明する。このような登場場面と人物の交錯は、物語をよりミステリアスにいろどっている。難点をいえば、その複雑さが、若干物語を読みづらいものになっていることも確かである。実際、なんども本書冒頭にふりかえって、登場人物の説明を読み直しもした。

本書は、スペイン本国では、2008年に、スペインの児童文学賞のひとつである「バルコ・デ・バポール賞」を受賞している。初版は、ハードカバーであったものが、またたくまに安価なペーパーバックでの出版も果たしていることを考えれば、この作品が、いかにファンタジー好きの読者の心をとらえて離さなかったかがわかるだろう。また、登場する若い主人公たちが、一生懸命、自らの運命に立ち向かい、未来をその手で切り開いていこうと戦う姿は、現代の若者にも、ぜひ見習っていただきたい点でもあり、その真摯な姿こそ、読者をひきつける魅力でもあるのだろう。また、物語の根底で、作者は不思議な境遇の登場人物を通して、「命」や「生きること」の意味をこんこんと問うている。それゆえに、おどろおどろしいドラゴンも登場すれば、戦いの場面もあり、残忍な情景もある物語であるが、読了感は、やけにすがすがしく希望に満ちているのだ。さらに、本書は、子どもからおとなまで年代を問わず楽しめる物語でもある。

最後に、『イフifー王国の秘密』の原題は、《El secreto de if=イフの秘密》であり、作者が王国の名前に《if》をもってきた意味をおしはかりつつ読むのもまた一興である。

ばんどう しょうじ（教授・スペイン語学）